

2025(令和7)年度 個別学力検査 前期日程

## 文学部 人間関係学科 小論文

### 【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は9時30分から11時30分まで(120分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に7ページあり、解答用紙は2枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入してください。
6. 解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

次の文章を読み、問いに答えなさい。

エラが初めて私のオフィスで“タイムトラベル”したとき、私には何が起きているのかすぐにはわからなかった。彼女は椅子にゆったりと腰掛け、両手を組み、背筋を伸ばし、足の裏をぴたりと床につけていた。劇的な変化はなく、震えも痙攣もなかった。しかし次の瞬間、彼女の姿勢がほんの少し変わったことに私は気づいた。また、表情がわずかに和らいだ。耳でも変化を感じた。声色が変わり、いつもよりほんの少し高い声で、歌うように話していた。最初は興味深く感じただけだったが、徐々に不安感が増していった。ふと思いついて、年齢を尋ねてみた。「7 歳」と彼女は答えた。エラの実際の年齢は 19 歳だった。

私はトラウマと摂食障害、自傷行為、パーソナリティ障害、そしてジェンダーとセクシュアリティの問題を専門とする認定臨床ソーシャルワーカーだ。また、文化とメンタルヘルスの接点を専門に研究している文化人類学者でもある。エラに私を紹介したのは、彼女が受講していた授業を担当していた私の大学の同僚だった。エラと私は週 2 回のセラピーセッションを始め、やがてそれは週 3 回に増えた。セラピーは 4 年半続いた。

エラが私のところに来た目的は複雑性心的外傷後ストレス障害（複雑性 PTSD）を治療するためだった。彼女は幼少期に信頼していた宗教指導者から長期にわたってひどい性的虐待を受けていた。悪夢やフラッシュバック、不安に悩まされ、自傷行為などの症状があった。しかし、それだけではなかった。エラはたびたび時間が飛び、不意に“意識が消え”、“目覚める”と違う服を着ていることがあると話した。エラは自分が経験した強烈な思考や感情、衝動を自分ではない別の誰かの経験であるように感じていた。

ある意味それは正しい認識だった。やがて、エラが「解離性同一性障害（DID）」を患っていることが明らかになった。DID 患者は複数の異なるパーソナリティ（人格）を持ち、それらが定期的にその人の行動を支配するとともに、記憶に複数の空白期間が見られる。一般に「スプリット（分裂）」や「多重人格障害」と呼ばれることも多く、その診断基準と病態については米国精神医学会の『精神疾患の診断・統計マニュアル 第 5 版』（DSM-5）に掲載されている。

セラピーの期間中に、エラは2歳から16歳までの12の異なる人格（彼女自身は「パーツ」と呼んでいる）を示した。それぞれのパーツは、名前も自身の記憶や経験も、さらには話し方から物腰、筆跡まで異なっていた。言葉でコミュニケーションするパーツもいれば、言葉を発せずに絵を描いたり動物のぬいぐるみを使って場面を演じたりして伝えるパーツもいた。たいていの場合、それぞれのパーツは自分以外のパーツが“表に出て”いるときに何が起きているのかを知らなかったのも、自身の存在は断片的で混乱したものになっていた。

（中略）

7歳のパーツが私の前に初めて現れて驚かされた冒頭の出来事は、セラピーを開始してから13カ月ほどたったときに起こった。その後、エラはセラピー中に幼いパーツと入れ替わることが多くなった。いくつかのパーツは完全にフラッシュバックモードに出てきて恐れおののいていたので、大丈夫だよと声をかけて落ち着かせる必要があった。他のパーツは沈黙したり怒ったりしていた。7歳のパーツと私は床に座って塗り絵をしたり絵を描いたりしながら、エラの現在の生活で起きていることや、過去に起きたことについて話をした。複数のアイデンティティを区別するため、エラはパーツたちに別々の色のマーカーを使って書いたり描いたりすることを求めた。7歳のパーツは紫を自分の色に選び、名前もヴァイオレットとした。

エラが識別できる限りでは、これらのパーツはすべて異なる年齢の彼女自身だった。ある種の状況や感情に対処するのが得意なパーツもいて、そうした感情が特に強いときや、そのパーツが現れて行動する必要がある状況になると“出てくる”のだった。

しかし、パーツどうしが対立することもあった。例えば、エイダという16歳のパーツが最初に現れたのは、エラが自分の虐待経験を高校の進路指導教員に話したのにまったく相手にされなかった直後だった。その結果、エイダは人を信じず、疑り深くなった。彼女はまた、非常に厳格で道徳的かつ自己懲罰的な性格で、私を含め誰に対してもすぐに辛辣な言葉で食ってかかった。エイダは自身を保護者だと考えていた。ヴァイオレットはまったく違った。簡単に人を信頼し、惜しみなく愛した。人とつながりたいという気持ちが強かった。そのため、ヴァイオレットとエイダは仲が悪く、全面的な内紛に発展することもあったが、たいていは年上で力があるエイダが勝った。エイダはヴァイオレットを罰するために「肉体」を痛めつけることもあり、腕や脚を

叩いたり噛んだり、意識を失うまで枕を顔に押し当てたりした。こうした行動をヴァイオレットは自分を生み出した虐待の再現として経験していた。

(中略)

次のステップは、大きな苦悩とトラウマを抱えたこの女性を助ける方法を考えることだった。ここで、私の人類学の知識がセラピストとしての仕事に役立った。「これは彼女なのか、そうでないのか」という問いをひとまず脇に置いて、①「健全な自己」というものに関する私たち自身の思い込みを疑ったらどうなるか考えてみることにした。

現代の西洋では、一般に、自己とは境界があり、ユニークで、多かれ少なかれ統合された感情認識と判断、行動の中心と考えられており、他の自己や周囲の世界とは区別できるとされている。この自己はただ1つの個人的で私的でプライベートなものであり、自分以外は誰も直接アクセスできない。自己は人間の核であり、体験の中心であり、自分を自分たらしめている基本的な側面なのだ。

この自己の概念は西洋文化にとって根源的なものであり、当然の事実のように捉えられている。自明のことと見なされ、精神の健康や疾患に対する理解の基礎になっている。DSM-5 で概説されているほぼすべての障害は、自己とは何であって何をするのかに関するこの理想化された概念からの逸脱であると説明されている。「自己の混乱」は精神症や離人症、境界性パーソナリティ障害、共依存、摂食障害、解離など多くの障害の特徴だ。つまり、「自己」に対する私たちの文化的な理解は、精神の疾患や健康の定義に大きく関わっている。

しかし、このような自己に関する理解は決して普遍的ではない。人類学者は、以前から自己に関する考え方が世界中の文化圏で大きく異なることを報告してきた。実際、1つの肉体に複数の実体が同時に存在する可能性は広い地域で信じられている。

例えば中央アフリカのいくつかの地域の人々は、子どもは誕生時にいくつもの異なる魂（母親の一族のものや父親の一族のもの、他の一族のものなど）を受け取ると断言する。エクアドルのヒバロ族の人々は3つの魂を持ち、それぞれがユニークな潜在能力を有しているとする。西アフリカのダホメ族（フォン族とも呼ばれる）では、女性は3つの魂を、男性は4つの魂を持つと伝統的に信じられていた。カメルーンと赤道ギニア、ガボンに住むファン族の人々は、自分の異なる側面を支配する7つの魂を

持っていると感じている。北米先住民のいくつかのコミュニティでは女性と男性の「2つの魂」を持つ人がいると信じられている。また、ユダヤ教の聖典の解釈の中には1つの肉体に最大4つの魂が転生できるとするものもある。また、世界中の文化において、超自然的な存在にとりつかれる「憑依」が認識されている。

このような考え方は遠い地域のものとは限らない。人類学者のソルダス（Thomas J. Csordas）によると、米国の福音派キリスト教徒の中には、自分の体の中に複数の悪魔や霊が存在し、積極的に関与していると考えている人もいる。

（中略）

つまり、私たちはみな複数のパーツを持っている。それを不自然なものとは感じず、頻繁にそれらについて話してさえいる。この記事が執筆しながら、私のパーツの1つは自分が学んだことを人々と分かち合えることにわくわくしている。また、別のパーツは他の仕事のことで気がめいっており、この執筆のせいで後回しになっている仕事を気にしている。さらに別のパーツは、私の説やエラがどのように受け取られるかを心配している。さらに、もう1つのパーツはこの仕事をやり遂げたいと望んでいる。このように自分の異なるパーツが同時に働いていても、私たちは警戒心を抱くことはおそくない。私たちはみなこの手の複雑さに慣れている。その意味では、エラが私たちと大きく異なっているわけではないと思う。ただし、エラの場合、パーツどうしの間に障壁があり、私たちの多くが当然だと思っている連続した意識を分断している。

エラは確かに問題を抱えた若い女性だったが、人類学の観点から見ると、自己のコミュニティを持つ1人の人間のように思えてきた。人類学者は、コミュニティと関わり、理解するのが得意だ。コミュニティに赴き、そこで暮らす人々の話に耳を傾け、彼らの生活の仕方や相手との関わり方を観察し、そこから学ぶ。

（中略）

私たちはエラのパーツ間のコミュニケーションを増やすことから始めた。例えば、各パーツが表に出ているときに行ったことをノートに書きとめ、他のパーツが表に出たときに何が起こるかがわかるようにした。しばらくすると、パーツどうしが時々メールでやり取りをするようになった。エラとパーツたちはやがて“チームミーティング”をするようになった。エラが頭の中に作り上げたミーティングスペースは、カラフルなソファやクッションが置かれたリビングルームで、幼いパーツたちのためにお

もちやも用意されていた。

それでもパーツ間ですべてが共有されたわけではなかった。各パーツの思考や感情、記憶の間には境界線が根強く残っていて、物事が常にスムーズに進むとは限らなかった。しかし、エラのパーツたちは次第に専門家チームとして機能するようになった。あるパーツはテストが得意で、別のパーツは目上の人と話すのを苦にせず、さらに別のパーツは情緒的な愛着を心地よく感じた。いつも傷ついていると感じているパーツもいたが、やがてバックグラウンドでそっと泣くようになり、エラを支配して機能不全に陥らせることはなくなった。ヴァイオレットとエイダまでもが協力し始め、永続的な愛着を持ち合うようになった。

エラの大学卒業が近づいて私たちのセラピーが終わることになったとき、エラは標準的な治療ガイドラインに従えば、まだ「完治」していなかった。ヴァイオレットやエイダをはじめいくつかのパーツは依然として存在していて消え去る気配はなかったが、エラが日常生活に支障をきたすことはなくなっていた。エラとパーツたちは統合や融合は選択肢にないと主張し続けた。では、私たちのセラピーは成功したのか、それとも失敗だったのか？

この問いへの答えは白か黒ではない。エラの各パーツが連携するようになると、彼女の人生は徐々に後ろ向きではなく、前向きに弧を描くようになった。大学を優秀な成績で卒業し、国内有数の大学の学位を取得した。その後、大学院に進み、特殊な支援を必要としている子どもたちと関わることを専門に学んだ。この分野に秀でていたエラは、自分の幼いパーツがバックグラウンドにいまも存在しているおかげで、他の人ならイライラしたり手に負えないと思ったりする子どもにも共感できると話してくれた。数年後、エラは自分のこれまでの人生をすべて打ち明けられる素晴らしいパートナーとめぐり会い、恋に落ちた。やがてふたりは結婚し、第一子が誕生した。

しかし、エラは最近、人生は完璧ではないと私に言った。彼女はいまでもトラウマの様々な後遺症に苦しんでいる。毎晩ではないが、いまも悪夢に悩まされている。虐待の記憶は鮮明に残っている。ヴァイオレットやエイダらはほとんど表に出てこなくなったが、エラはパーツたちの存在をまだ感じている。彼女は一步步、癒しの旅を続けている。

エラの「症状」が完全には消えていないとはいえ、セラピーは成功したと私は思い

たい。しかし、エラに対する私のアプローチが誰にでも通用するものではないことを強調しておく。クライアントが違えばニーズも異なる。エラの症例では、彼女の内的世界を理解し、それと対立するのではなく連携して取り組むのに、また標準的なモデルには当てはまらない健全な自己が存在する可能性を思いつくのに、人類学の知見が役立った。

エラはセラピーが終わった後もその存在が頭から離れないクライアントの 1 人であり、私は自分が学んだことをいまでも振り返っている。エラは DID の現実を人々に理解してもらい、たとえ困難であっても前進する方法を見つけられる可能性があることをわかってもらうために自分の話を広めてほしいと私に言った。DID に関する考えがどうあれ、エラの物語は、想像を絶する心の傷に苦しむとはどういうことかについて多くのことを教えてくれる。非常な困難にもかかわらず前に進む道を見つけるにはどうすればよいか、そして②本当に人間的であるにはどうしたらよいかを教えてくれる。人間的であることがほとんど耐え難いほど苦しいものであっても。

(R. J. レスター「解離性同一性障害 - 新たな治療のアプローチ」『日経サイエンス』(2024 年 3 月号) による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。)

問1 下線部①にある、「健全な自己」に関する私たちの思い込み、とはどういうことをさすのか、本文をもとに「健全な自己」「私たち」の内容に言及し説明せよ。(40点)

問2 下線部②にある、本当に人間的であるためにはどうしたらよいのかについて、本文に即して説明せよ。(40点)

問3 著者が述べている人間の普遍性と文化的多様性に対する考え方をもとに、人間を理解するために必要な視点と、そこから生まれる人間関係のありかたについて 800 字以内で述べなさい。(120点)